

---

# 恋の始まり

クノウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋の始まり

### 【Nコード】

N1306A

### 【作者名】

クノウ

### 【あらすじ】

t w i l l i g h t の シ ュ ウ ジ 目 線 で の ス ト ー リ ー 。

今日も普通の日だと思った。

アツシ達と昨日のドラマのことや遊びに行く話をしたり、弁当を食べながら、くだらない世間話してみたり  
受験に備え勉強を頑張ってみたり……

とにかく、今日もそんな一日だと思った。

朝、下駄箱を開けるときまでは……………

「シュウジ君へ」

そう書かれた紙が入っていた。

初めは、なんだかわからなかった。だが、すぐにそれがいわゆる『ラブレター』だと気付いた

今までこんなもの貰ったこともないし、貰えるほどモテルつもりもなかった……

「は」どうするべ……」相手はクラスメイトの女の子だ。

かるく挨拶やアケミを介してぐらいなら、少し話したことがある程度。

べつに好意を抱くほどの付き合いはしていないつもり……だった。  
まあ、クラスの中でも小さいほうで可愛い部類に入るほうだと思  
う。

だが、つき合つとなると話は別だ。

「は……」

「コラッ、シュウジ。なぐに真昼間からため息ついてんだよ！」  
「なんだ、アツシか…」「なんだとはなんだ！せつかく人が心配してやったのに。」  
「ああ、すまね。先生きたから昼にでも話すよ。」「ああ、わかったよ。じゃ！」

## 昼休み

「おいおい、マジか？」「あのちせちゃんがね」「シュウジ、お前もけっこうやるんだな！」  
「うっせえぞ、お前ら！！俺のことどう思ってたんだよ。」「そりゃあ……」  
「無口」「口が悪い」「顔がおつかない」

ポカッ×3

「「いつて」」「「何すんだよ」」「「うるせえ！！もうお前らには頼らん。」  
「なんだよ、シュウジがどうすればいいか？って聞いてくるから、せつかく相談にのってやったのよ」  
「そうだぜ、お前みたいな不器用な奴が恋愛に向いてると思えなishよ」  
「クッ！！」悔しいがその通りだった…だが  
「お前らこそ、彼女もいねえのにえらそうなこと言うなや！！告白されたこともあんのか？」

グサッ！！×3 三人は精神に致命的なダメージを受けた

「シュウジ、それを言わないでくれよ」「そうだと薄情もの」

「う、うううう羨ましい」

シュウジは三人を置いて行ってしまった

「くっそー、あいつらに相談したところで全く役にたたねえ……」

かといって、こういったことに免疫があるわけでもないシュウジにとって、すぐに答えを出せる問題ではない

「は、いったいどうすればいいんだ？」

パツカッパン

「コラ！！ばかシュウジ、なにしかした面してるべさ。」

「なんだ、アケミか……いきなり叩かなくてもいいべや。大体、お前じゃねえのか？これけしかけたの」

そして取り出す手紙

「あら！良かったじゃない。仏頂面のあんたでも好きになってくれる人がいたんだから。」

「やっぱりお前か。」「なに！？あんた嬉しくないの？こんなこと二度とないかもしれないのに。」

「うるせー、嬉しくないわけじゃねえよ……ただ……」「ただ？」

「こういうことに慣れてねえからよ、どう答えてやればいいのかわからなくて……」

「へーあんたも人並みに考えてるわけ。」「そうだよ、わかったらどっか行けよ。」

「あーら、そんなこと言っていていいわけ？せつかく助言してあげようと思ったのに……」

「助言も何も、お前が書かせたんだろ？これ。」

「バカか？あんた。」「なにがだよ！！」

「確かに、手紙を書けて薦めたのはあたし達だよ。

でも、ちせはホントにあんたのこと大分前から好きだったのよ！いくらあたしでも、好きでもない奴に告白しろなんて言う訳ないべ

さー！

大体、何処に悩む必要があるんだ？好きでも何でもないんなら断ればいいべき。

嫌いじゃなければ、つき合ってみればいいしょや。これが一生の付き合いになるわけじゃないんだ。

きっかけなんてわからない、いつの間にか好きになることもあるかもしれないべ。

あの子が今欲しいのは、イエスカノーの言葉だけだよ。早く答えてやりな、じゃ……」

「あっおい！」

そういったアケミは、どこか悲しそうな顔をしていた

「くっそ、言うだけ言って行きやがって」

でも、確かにアケミの言うとおりだ。何も悩む必要はなかった。

ようは俺の気持ちしだいだ。

いつの間にか『女性とつき合う』ということに対して、逃げ腰になっていたのかもしれない。

あの時から……

今の自分は何か足りない気がする……

いつもの日常、いつもの光景、変わりばえの無いこの日常。変えてもいいのではないか？

この足りない『何か』を埋められるなら。

アケミの言った通りだ。べつに深刻に悩まなくても良かった。きっかけなんかわからない。

好きになるのもならないのも、まだ分からない

それなら……

午後の授業、ふと彼女のほうをしてみる。

平静を装っているようだが、こっちのほうをさつきから ちらちらと振り向いている。やはり返事が気になるのだろう。

その仕草を見ていると、なんだか 返事がまだなことに罪悪感がわく。と同時に可愛いと思えてくる

俺は机からルーズリーフを取り出し、簡単な言葉を書く

ただ

『放課後、屋上で待ってます』  
とだけ。

今日最後の授業が終わると、すぐに昇降口に行き誰も見て無い事を確認して、その紙を下駄箱に入れた

HRが終わると、用があるからと誘いを断って屋上に行った。

誰もいない屋上。ひとりで待ちながら考える。どうやって話を切り出そう？ と言えばいいんだろう？

色々と浮かんでは消えていく……

すると

「あ、あの……」 小さな声がした

「あ、ああわりい、こんなところに呼び出して……」 そう答えるので精一杯だった

「ううん、わたしのほうこそ、困りましたよね？ 突然あんな手紙渡されたら……」

「ま……まあ、困ったというよりビックリした。オレ、この手の話に疎くて、その……なんて返事したら いいか思いつかなかったから、放課後になっちまって。やっぱり自分の口で返事しようと思ってさ。」  
こんなささいなやり取りだが、ホツとする。何とか話はできている。だが、相手の子は普段から気が弱い子だ。告白するのはきつと恥ず

かしかつただろう。

ここは俺から切り出さなくては……

ゴクツ      喉がからからに乾く      うまく声が出てこない      でも

……

「オレの返事は……」

相手の子は恥ずかしいのかうつむいてる

「いいぜ、つき合っても」

い、言えた…

本当はもつと気の利いた言葉をかけてやるべきなのかもしれないが、  
これが精一杯だ

「今…なんて？」

「だ、だから… いいつて…」

「え？」      「だから、いいぜ……その、つき合ってやつても……」

「う、嘘じゃないですよね!？」

「そんなはずないだろ!! オレだって悩んだんだからな。」

おそらく実感できないんだろう。

俺だってこんなんで恋人同士だっていわれても実感できない

その時

「お、おいどうしたんだよ!？」

彼女が泣きはじめた……

「い、いえ。なんでもありません。ただ、安心したら涙が出てきちゃ

って……」

「そ、そうか……」「じ、ごめんなさい。」「べつに謝る必要なんかねえよ。」

「あーそうですよね。」

こんなことで泣いてしまうものなのだろうか

こういうときこそ、本当に声をかけるべきなんだろうが、なかなかいい言葉が浮かばない

しばらくの間、沈黙が続く

「涙は止まったか?」「あ、はい……」「そうか……」

とりあえずは良かった。泣き止んでくれないことには話をふりづらい。

「あ……あの……」「ん、なに?」「い、一緒に……」

突然話しかけられ、思わず緊張してしまった

「ご、ごめんなさい。やっぱりべつにいいです。」

しまった……ちょっと怖い顔をしてしまったのだろう。

これでは顔が怖いといわれても仕方ない。ここは……

「いいぜ。」「え?」「帰ろうってんだろ?」

これでいいんだろうか?

「あつ、はい!で、でもいいんですか?わたしなんかと一緒に……」

「ばーか。お前、オレの彼女なんだろう?それ位べつにいいじゃねえか。」

彼女の顔が涙混じりの笑顔になる。初めて見る俺に向けられた“笑顔”

その顔を見て、ドキツとした。

可愛い…… 本当にそう思った

なんだろう…さっきまで悩んでいたことがバカみたいだったように感じる

たしかに、まだ女のことなんか分からない。つき合うつてどんなことかも良く分からない。

正直面倒くさいとすら思う。

でも、少しずつでいいから分かっていけばいいじゃないのだろうか？  
いずれ別れることになるかもしれない。

いずれ俺も彼女を好きになるかもしれない

先のことは分からないが、このままずっとつき合ってみるのもいい気がする

隣には嬉しいのか照れてうつむいている俺の“彼女”……

その顔は夕日に照らされ、さらに赤くなっている。おそらく俺もそうだろう。

そんな彼女の顔を見ながら、明日から始まるであろう新しい“日常”をどう一緒に過ごしていくか 考えていた。

〈END〉

（後書き）

< font size=2> シュウジじゃない!! そんな気がします。

いつもいつも書いてる途中でキャラが一人歩きして、そのキャラらしくない言動になってしまう……

でも、みなさんの反響がとてもよかったので、一日で仕上げました。これから感想をよろしくお願いします。やはり感想をもらえるとやる気がです。

北海道弁、これでよかったかなあ? < / font >

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1306a/>

---

恋の始まり

2010年10月11日14時33分発行